



# 「水都」大垣

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

## 岐

岐阜の大垣は、大垣城の城下町、河川舟運の港町として栄えた。さらに松尾芭蕉の「奥の細道むすびの地」としても知られている。市街地の東に揖斐川、西には杭瀬川が南流し、市街にも水門川などの河川が流れ、さらに扇状地平野の末端に位置しているため、多くの地下水が湧き出ることから、「水都」として観光誘致をしている。

かつては、この恵まれすぎた湧水が仇となり、その排水処理のために開削されたのが水門川などの人工河川だった。水門川は、大垣城主氏家直元が永禄四（一五六一）年に開削したと伝えられており、排水路としてのみならず大垣城の外濠として、また運河としても活用され、大垣城下の発展に大きく寄与した。

さて、大垣駅を降りてみると、駅の北側と南側で様相が大きく異なることに気がつく。北側は駅からのペDESTリアンデッキが直結した巨大ショッピングモールがたちならび、近年開発された地域だといふことがわかる。

大垣は明治末期から大正期にかけて、近代工業都市への道を進み始めた。その背景には明治二十二（一八八九）年の東海道線全通をはじめとする鉄道輸送の普及や水害の克服、さらに工業用水として大

垣を大いに潤す豊富な地下水の存在があった。そうして鉄道沿線には繊維工場や化学工場がたちならび、岐阜県随一の工業都市となる。しかしながら、一九七〇年代の石油ショック以降に繊維・化学工業が衰退すると、広大な工場は遊休地となった。北側はこれらを利用して開発されたものだ。

一方、南側は復元された大垣城が鎮座する中心街にもかかわらず、昭和四十年代で時間が止まったような街並みで、アーケードに小売店が軒をつらねるが、多くはシャッターが降りていて、北側のショッピングモールが買い物客で賑わっていたのと対照的だ。行政は問題視していることだろう。

大垣駅南口からメイン通りを南下すると、新大橋交差点で「水都大垣」の要となる水門川と出会う。せつかくだから、川沿いを江戸時代の舟運の拠点だった船町港跡まで歩いてみることにするが、川はコンクリート護岸が劣化して、どうにもうら寂しい。

同行者は大学時代に松尾芭蕉を研究するゼミに所属していたので、卒論執筆のため大垣を訪れたことがあるというが、覚えているのはこれから向かう船町港あたりで、ヌートリアが泳いでいたことだけだという。ヌートリアとは外来の半水性巨大ねずみのことだが、水門川沿いがこのあり様では、ヌートリ

アに街の記憶を奪われていても仕方がないだろう。「大垣の湧水」の看板を大きく掲げた八幡神社前から川は南に折れ、護岸には丸石が使われて幾分ましになるが、結局、「奥の細道むすびの地」の碑がある船町港跡まで、ほとんど人に出会うことはなかった。個人的には人通りが少ないので快適だったが、「水都」をアピールするためには、かなり大胆な水辺空間の改良が必要になるだろう。



船町港跡付近の水門川

[交通] 大垣駅から船町港跡まで水門川沿いを徒歩約30分